

優秀賞

ぼくとお兄ちゃんにできること

栃木県 寺尾小学校 三年 小林大馳

「明日の朝は、ごみひろいをしよう。」

思い切ってぼくが言うと、お兄ちゃんは、

「いいよ。」

と言って、にっこりわらってくれました。

ぼくは、小学3年生。中学生のお兄ちゃんといっしょに、雨の日がいはいは毎朝ランニングをしています。朝早くおきて、朝ごはんの前に走ります。家の近くの田んぼの道の道を走っていますが、けしきもきれいで、空気もしんせんで、つかれるけれど、とても気持ちがいいです。

でも、道のわきに、たまにごみが落ちているのを見かけます。しかも、毎日少しずつごみがふえている感じがするのです。ぼくはとてもいやな気持ちになりました。そこで、お兄ちゃんに「ごみひろいをしよう」と言ったのです。

次の日、ぼくたちはトンゴとごみぶくろを持って出発しました。さっそく、わりばしやたばこ、あきカン、はっぼうスチロールなどが落ちているを見つけました。ひろっていると、すぐにごみぶくろがいっぱいになってしまいました。ごみはたくさんあって、ひろうのはたいへんだったけれど、きれいになった道を見ると、ぼくの心はとてもはれはれして気持ちが良くなりました。なので、お兄ちゃんと二人で「水曜日と金曜日のごみひろいの日」と決めました。

次のごみひろいの日、ぼくはまた、たくさんのごみを見つけました。この前きれいにしたばかりなのに、ふくろがすぐにいっぱいになってしまいました。

(なんでごみを道路にすてるんだろう。)

と、ぼくは思います。ふしぎでしょうがないです。ごみをすてる人は、

(きっと自分の家の近くにはすてないんだろうな、だれも見えていないところですててしまうんだろうな。ごみを、ごみばこにすてるだけのことがめんどくさいなんて、なんてめんどくさがりやなんだろう。)と思います。ごみを道路にすててしまう人の心は、ごみが落ちている道路のようによごれているのだと思います。

ごみひろいを始めてから、今まで気づかなかったような小さなごみまで気になり、ひろうようになりました。ごみをひろうたびに、ぼくの心が少しずつきれいになっていくような感じがして、ごみひろいが楽しくなってきました。

ぼくの住む寺尾地区は、山と川と田んぼにかこまれたしぜんがいっぱいの町です。このしぜんがいつまでもきれいなままだと、とてもうれしいです。ぼくたちががんばったことで、みんなが気持ち良くなるから、とてもしあわせな気持ちになります。ぼくとお兄ちゃんができることはとても小さなことだけれど、みんなのためになることができるのは、とてもうれしいことなのだということに気づきました。これからもがんばりたいです。